

一
万
七
千
年
後
の

未
来
か
ら
来
た
サ
リ
ア
さ
ん

著
者
・
ろ
っ
き
ゆ
ん



一万七千年後の未来から来たサリアさん

ろつきゆん

序章

狼斗は溜息を吐いた。

「――あゝ、ツイてないよ……」

天空を染め上げるのは、色濃くもぶ厚い雨雲だった。

大気は酷い湿気を帯び、着てる衣服を肌に張り付かせる。

雷鳴が光だと、大気は押しつぶすような圧を掛けて重苦しい。

鳥の囀りさえずりや人の笑い声。

それらを育む陽光が消え去って、どれだけの日数が経ったのだろう。

今にも泣きだしそうな黒雲は、俺がやってしまったかもしれない行いをおこな哀れんでいるようにも見受けられ、少し儂くも物哀しい……。

視線の先、災厄の中心地へと続く道がある。

振り返れば瓦礫と化した車列の群れ。

どこを向いても人の気配は一切ない。

ただ……それは俺の日常と、さして変わりがある訳でもなかった。

いつの頃からか親友が完全に消え去ってしまった。

お約束のヒロインになりそうな幼馴染もいるにはいたが、高校に入ってから急に距離を置き

だした。

信じられるか？

俺主人公じゃないの？

ヒロインが不在だよ？

何この世界？

ヒロインがないよ？

この時点で俺はヒーローに成り損ねたらしい。

そして家族に至っても少し妙だ。

両親共々、一人息子を放って異国へ旅立ってしまったている。

もう少し会話なり親孝行しておけばよかったと、普段は気にもしない事が後悔となって心に押し寄せていた。行動から出た結果に後悔や恨み、つまり遺恨がある訳ではないが、もしかしたら自身が行った結果の代償に、世界がこうなってしまったのだとしたら。

自責の念が、こんな無謀な行動に駆り立てたのかもしれない。

「——オッえ!？」

失敬。

ちょっと喉が咽った。

そんな後悔に苛まれた自分が見目麗しい少女と出会い、本気で彼女が怯えるのを目の当たりにしたらどうだろう。きっと誰だって何とかしてやろうと思うはずだ。

だからさ、もう一度だけ力を籠めてみる。

このままやられっぱなしってのは、性に合わないからな。

——さて、いよいよ本題だ——

誰でも死の間際になると、眼前に天の使いが現れるという。まさにカトリック系の思考だね。

だけども、生きてるのに現れたとしたら。

しかもそれは如才な笑みを湛えた金髪碧眼で、白地の布を纏うトーガを着飾った巨大な天使で、それが自分に攻撃してきたとしたらどうしよう。

「うッ、ゲヘッ」

こんな調子で呻きを上げるレベルの話でだ。

薄れる意識の中で嗚咽すると。

「あゝ……ツイてない……」

残念そうに俺は呟いた。

視線を落とすと、俺の胸に天使の御手が突っ込まれて、身体は天に掲げられている。

だったら天使にだってこんな言葉遣いを使ってもいいよな」
許されるよな」

先に謝っておく、ごめんなカトリックもうこっちはそれどころじゃねえんだ。

悪いがこっちは命がけ、

確かよく言うよな。

左の胸を貫かれたら右の胸を差し出せ。

だったっけ」

だからあえて言わせてもらう。

ふざけんじゃねえよ三

「どうしてくれよう……、ほんと、こいつどうしてくれよう……ッ!?」

涙交じりの嗚咽が意思とは裏腹に漏れていく。

旋律混じりの言葉が虚空に響き、天使たちが一斉に笑い始めたのを切っ掛けに、俺は喉に絡まる血塊を金髪の天使へ吐き捨てた。

もう一度天空を仰ぎ見る。

闇のピロード広がる大空で、幾重にも旋回するのは輝き放つ無数の天使たち。

地肌晒す大地に視線を向ければ、這い回るのは異形の群れ。

逃げ道は……ない。

貫かれた胸。

吊り上げられた体。

天使に胸倉ごと引き寄せられる。

刹那——俺、かみぎりろうと神桐狼斗は、暗闇に吞まれる意識に獅噛み付き、握った拳を天使の顔面へ力任せに叩きつけていた——

……何でこうなったのか。これも話せば長くなるんだけど。おそらく全ての発端は俺にある。

みんなにとっては原因不明。

俺にとっては分かってる。